

図書だより

第6号
図書委員会
広報班
2019年2月22日



多読賞 TOP 3からのコメット



多読賞発表



個人の部

- | | | | |
|----|------|--------|--------------|
| 1位 | 3年2組 | 村山真子さん | 114冊 |
| 2位 | 3年6組 | 結城宏介さん | 72冊 |
| 3位 | 2年3組 | 佐藤晴夏さん | 59冊 |
| | 3年6組 | 半田桃香さん | 59冊 |
| 5位 | 2-1 | 武田未来 | 8位 1-6 神林舞風 |
| 6位 | 3-1 | 小野匠 | 8位 3-1 佐藤彩 |
| 7位 | 3-7 | 後藤瑞貴 | 10位 1-5 佐藤勇介 |

クラスの部

おめでとうございます



- | | | |
|----|------|---------|
| 1位 | 3年2組 | 387ポイント |
| 2位 | 3年1組 | 278ポイント |
| 3位 | 3年6組 | 264ポイント |
| 4位 | 1年2組 | 126ポイント |
| 5位 | 3年5組 | 116ポイント |

1位

最後の最後に多読賞1位です。最後の最後に多読賞1位です。いたたいた嬉しいですね。いたたいた賞金まで本を買いたいと思います(笑)図書室に行くと司書のみなさんとお話しできるとは嬉しいですが、お礼も忘れずに本を返すのも嬉しいですね。3年2組 村山真子

これからもうたくさん本を読んできてほしいと思います。3年6組 半田桃香

3位

今年も言えた冊数はあまり変わらなかったと思うが全体的に本を言える人が減ったのでこの順位になったと思う。来年は本を言える人がもっと増えてくるといい。3年6組 結城宏介

多読賞をいただき本当に嬉しく思っています。本を読むことが小さいころから好きでまだか賞をいただけるとは思っていませんでした。これからもいっぱい読書します。2年3組 佐藤晴夏

表彰について

- | | | |
|------|---------------------------|-----------|
| 個人の部 | 今年度の貸出冊数TOP10までを表彰し表彰します。 | 1位 3000円分 |
| | 上位3名には副賞として図書カードを贈呈します。 | 2位 2000円分 |
| | | 3位 1000円分 |

クラスの部

各クラスの貸出冊数に、3冊以上貸出ポイント数の割合を足し、0冊貸出者数の割合も加え、独自のポイントで計上。上位全員が3冊以上貸出したクラスの副賞として、全員に図書カード500円分贈呈します。

今年度は、全員が3冊以上貸出した副賞該当クラスはありませんでした。そのうち、副賞贈呈対象となる10位までのクラスには、500円分の図書カードを贈呈します。

「人」と「食」と

2年4組 小関明日果

この本を読むきっかけとなったのは私の祖母のすめである。祖母は今も現役の農家であるが、食べ物を残しがちの私に、食のありがたみが分かるからと言ってこの本を渡した。しかし、当時の私はまだ中学生だったので難しく読めなかった。あれから三年が過ぎ、高校二年生になった私は再びこの本に挑戦する良い機会だと思いい、読んで感想文を書くことに決めた。

「食べる」という行為を軸にして、著者はさまざまな場所へ旅をする。紛争地域、病や飢餓の進むちいさき、チエルノブイリ原発事故が起きた地域、地球温暖化の影響を受けた人々がいる地域、かつて戦争で日本兵から被害を受けた人々がいる地域……読み進めていく度に吐き気がするほど気持ちが悪くなり、手が止まってしまうことも多々あった。フィクションだと思いたい、しかしこれは著者が実際にその場所へ行き、取材をして見せつけられた現実なのだ。そう考えると本の冒頭でもあるように、私たち日本人の舌は「飽食に慣れ、わがまま放題で、忘れっぽく、気力に欠け、万事無感動気味」なのだと思つた。そして読み進める度にその思いは強くなる。特に印象に残った話を二つ紹介したい。

青少年読書感想文コンクール 山形県代表作品

『もの食う人びと』 辺見庸 著

「食わずにすむのなら、それが一番だろう？ あんまもの……」

本当にその通りだ。自分が今、おいしい物を好きにだけ食べられることがどれだけ幸せなことなのかひどく痛感した。そして、世界には私のような人とそうではない人がいて、生きる為にはそうしなければならぬ現実が胸がますます痛くなった。

二つ目はチエルノブイリ原発事故が起きた街の住人の話だ。危険地帯に住む老人は、基準値をはるかに超える放射線量のキノコが入ったスープを食べている。その老人は自家製のサマゴンという酒を飲めば大丈夫と言っているが、その真偽は分からない。老人も本当に信じているのか、信じたいと思っているのか分からなかった。老人は誰ともなしに叫ぶ。

「他に何を食えばいいんだ、他に……」

身体の具合が悪くなっても、年齢のせいなのか放射能による影響なのか分からない。しかし老人はいきていくために、今日もそのキノコのスープを孤独に食べるのである。

この話も他人事ではない。日本は、福島原発事故から今年で五年になる。五年経った今でも事故現場から半径二十キロメートル圏内などの市町村では帰宅困難地

まず一つ目は、バングラデシユの首都ダッカの人口百七十人のスラム街の話である。できるだけ現地民が普段から食べているものを食べようとした著者は、駅前広場の屋台でビラニ(焼き飯)とバット(白いご飯)を買う。十数円で買ったものだから米には腰がなく舌先が酸っぱい、と思っていると突然「ストップ！」と声をかけられた。たどたどしいある現地民の英語は次の瞬間、著者に衝撃的な一言を伝える。

「それは、食べ残し、残飯なんだよ。」

ダッカには金持ちが残した食事の市場があり普通の市場のように小売りも卸売りもあるのだという。仕入れ元はおもに富裕層たちがパーティーなどを開いたときに出る大量の残飯だ。現地民もそれを分かつたうえでお金を払い残飯を食べる。その残飯で生計を立てて生活している人もいる。この部分を読んだとき、驚きに体が震えた。残飯を食らうなんて同じ人間とは思えないと考えていた頭が、急に非日常から日常へと引き戻された。マナーやモラルとつた価値観は、生きることそのものが困難な世界では無力なのだ。もしかしたら私が普段の食事で食べ残しているものが、彼らの今日明日生きるための栄養分となっていたのかもしれないと考えると恐ろしくなる。現地民の言葉が胸に刺さる。

域に指定されており、未だに自分の家に帰ることができない人々がいる。農家の方がまた福島の地で生きようと再起しても、作つた農作物は風評被害により売れず、結局その土地を離れてしまふという話も聞く。しかし、放射能の汚染がないと分かりながらも、福島産の農作物に抵抗を感じてしまうのも事実だろう。一つの事故により、大切な食のあり方が、また一つきえていくのである。

「食べることは「生きること」に直結することを、実感しながら生活している日本人はほんの一握りだろう。しかし、この本を読んで広い視野で見ると、世界には「食」により明日生きることができない人、「食」により大切な人を失つた人、「食」により深い悲しみを押し殺す人、「人」と「食」は切つても切れない縁で複雑に繋がっている。そして、

きれいごとだけでは人は生きていけない。どんな状況でも、人は何かを食べて生きていくのだ。祖母の言う食のありがたみを噛みしめながら、恵まれた環境に生きる私たちは、現実を知り「食」と向き合う必要がある。

